

読みの観点を持たせるための「読むこと」の指導

東広島市立三津小学校 胡 秀明

1 実践の趣旨

私が担任する3年1組は、男子15名、女子15名の合計30名のクラスである。

年度の始めに行ったアンケートで、「読書が好きです」という質問に「とてもあてはまる」答えた児童は96%だった。実際に朝読書を始め、給食の待ち時間などにも読書をしている児童は多い。

しかし、「はじめての文章を読むとき、どのように読んだらいいかよいか分かります。」という質問に「よく当てはまる」と答えた児童は14%。「あてはまる」と答えた児童と合わせても87%という結果だった。

このことから、読書はしているが、なんとなく作品を読んでいるという児童の実態が明らかになった。

そこで読みの観点を児童に持たせ、作品を読む時に様々な読み方ができるようにし、日常の読書につなげていきたいと思い、この実践を行った。

2 実践の概要

(1) 単元名 パンフレットを作って、物語を紹介しよう

教材名「ゆうすげ村の小さな旅館」(東京書籍3年上)

(2) 単元の目標

- 場面の移り変わりや情景を、叙述を基に想像しながら読むことができる。
- 読み取った内容について自分の考えをまとめ、一人一人の感じ方について違いのあることに気づくことができる。

(3) 指導計画(全12時間)

次	時	主な学習内容
	①	○単元全体の学習の見通しをもつ。 ・教材文から物語の読み方について学ぶことを知り学習計画を立てる。
A	②③	○「ゆうすげ村の小さな旅館」を読み取る。 ・時を表す言葉に気をつけて、場面分けをし、第1～4場面を読み取る。
B	④	・第5場面を読み取り、物語の続きを考える。
C	⑤	・物語の「しかけ」に気づき、教材文のおもしろさについて話し合う。
	⑥	・教材文「ゆうすげ村の小さな旅館」のあらすじを書く。
	⑦	○物語を読み、パンフレットを作って紹介をする。 ・しかけのある物語を読む。(朝読書の時間などを活用。)
D	⑧	・パンフレットを作る。 あらすじコーナー作り
	⑨	しかけ紹介コーナー作り
	⑩	感想・おすすめコーナー作り
	⑪	・物語の交流会を行う。
四	⑫	○単元を振り返り、学習のまとめをする。

(4) 手立てと授業の様子

自分の経験で国語が一番おもしろいと感じたのは、同じ教材を読んでも一人一人の感じ方が違うのだということを知った時だった。

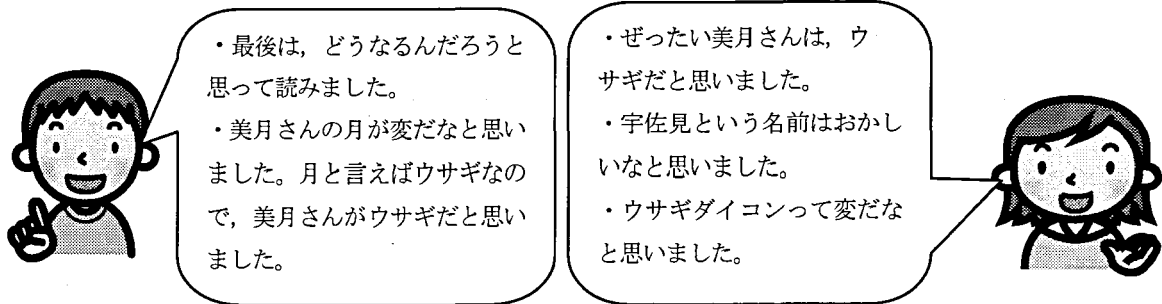
今回は教材文「ゆうすげ村の小さな旅館」の「しかけ」を活用して、読み取った内容をも

とに、お話の続きを考えさせる。そして、考えた物語を紹介することで、一人一人の感じ方について違いのあることに気づかせ、読み方には人によって違うということを学ばせることができる考えた。

また、一人一人の読みが違うのに、多くの児童がそれまで物語に出てこないウサギを登場させていることに気づかせることで、物語の「しかけ」という読みの観点も学ばせることができると考えた。

A 第2時 「しかけ」に気づかせるための教材文を途中まで提示する。

教材文「ゆうすげ村の小さな旅館」の「しかけ」に気づかせるために、主人公のつぼみさんが畑に美月さんを訪ねていくまでのところを児童に渡した。

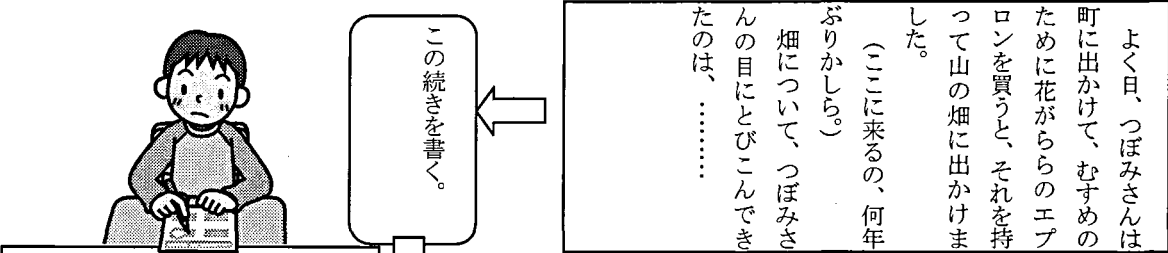


・最後は、どうなるんだろうと思って読みました。
・美月さんの月が変だなと思いました。月と言えばウサギなので、美月さんがウサギだと思いました。

・ぜったい美月さんは、ウサギだと思いました。
・宇佐見という名前はおかしいなと思いました。
・ウサギダイコンって変だなと思いました。

このような教材文の提示の仕方により、児童は物語の続きを想像しながら、読み取りをしていた。物語を予想することで、物語の「しかけ」に気づかせやすくなった。

B 第4時、「しかけ」に気づかせるために物語の続きを書かせる。



この続きを書く。

よく日、つぼみさんは町に出かけて、むすめのために花がららのエプロンを買って、それを持った。山に畑に出かけました。
(ここに来るの、何年ぶりかしら。)
畑について、つぼみさんの目にとびこんできたのは、……

児童が考えた物語の続き

物語の続き	人数	そう考えた言葉
美月がウサギだったという話	4名	宇佐見という名前、美月という名前、色白
(物語に)ウサギが出てくる話	19名	ウサギダイコン ウサギダイコンを食べると耳がよくなる
宇佐見親子が畑を耕している話	7名	

この続きの物語を、書くような場を設定した。物語の続きを書くことで、物語の「しかけ」に気づかせることをねらった。

30人の児童のうち、23人の物語の続きにウサギが登場していた。ウサギダイコンや美月という「しかけ」に関する言葉から、ウサギの登場を予想していた。

児童は、友達の書いた物語の続きにとっても関心を持っていた。交流の時間が待ち遠しいようだった。

C 第5時 物語の「しかけ」について理解する。

児童が挙げた「しかけ」の言葉

- ・だれにも会わなかったけど……。
- ・ウサギダイコン
- ・宇佐見, 美月
- ・ウサギダイコンを食べると耳がよくなる。
- ・白色のぼっちゃりとしたむすめ
- ・まほうのきき目

物語の続きを渡し、全員でゆうすげ村の小さな旅館を最後まで読んだ。

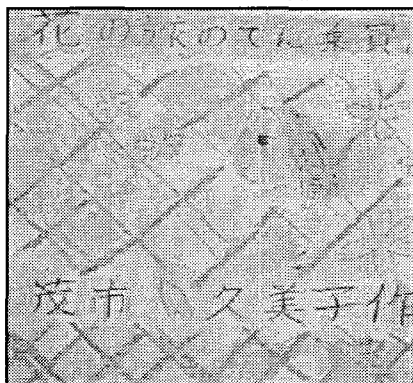
前時に書いた物語の続きを活用し、なぜたくさんの人がこれまで出ていないウサギを物語の登場させたのかを考えていくなかで、「しかけ(伏線)」について理解する授業を行った。

児童は自分の考えを持っていたので、いつも発表しない児童もよく発表し、お互いの考えをしっかりと聞き合うことができた。そして、「しかけ」について理解できた。

D 第三次 パンフレット作りの場を設定する。

第三次では、茂市久美子さんの「花の旅の添乗員」を読み、パンフレットにまとめる場を設定した。パンフレットには、あらすじコーナー、感想・おすすめコーナーの他に、しかけしょうかいコーナーを設け、児童が自分で「しかけ」を見つけてまとめることができるようにした。

児童の作品



パンフレットの中に、しかけしょうかいコーナーを設定したことで、児童は「しかけ」を意識して物語を読んでいた。

見つけた数には、差があるがすべての児童が「花の旅の添乗員」のなかにある「しかけ」を見つけることができ、しかけコーナーに作ることができた。

友達がどのようにパンフレットを作っているか、どんなしかけを見つけているかなどを意識して児童は活動していた。

交流の時には、児童は一生懸命、友達の商品を読んでいた。

3 成果(○)と課題(●)

- この学習を通して、児童は物語の「しかけ」を理解し、「しかけ」という視点を持つことができた。そして、日常の読書に生かそうとすることができた。
- 児童に自分の考えをしっかりと持たせた時、児童は友達との学び合いを、本当にしたいと思うことが改めてわかった。そのために、自分の考えをしっかりと持つための時間と手立てを十分に行い、交流の場では児童の考えを十分に把握した上で、子どもたちの学び合いのコーディネーターとして授業を進めていくことが大切だということがわかった。
- 物語の続きを書く。パンフレットを作るなどの書く力もこの単位では必要だったので、先を見通して、単元に必要な力を日常から育てる取組みをしておく必要があった。
- この単元で学んだ読みの観点を定着させるための、日常の読書への取組みを考えていく必要があった。

【後日談】

ある時、読書をするより外で遊ぶ方が好きな男の子が、「先生。しかけのある本を見つけました。」と言ってうれしそうに一冊の本を私の所に持ってきた。

その本は怪談の本だった。たしかにいろいろ不思議なことが起こり、正体はじつは幽霊だったという最後は「しかけ」のような気もするが、「しかけ」といっていいのか私には判断がつかなかった。

しかし、授業でやったことを日常の読書に意識するようになったことが、私はとてもうれしかった。